

# グローバルに活躍する前線から見た、インターネットの世界

JPNICには、グローバルな組織で役員を兼任しているメンバーが3名います。ISOC (Internet Society) 理事の江崎浩、ICANN (The Internet Corporation for Assigned Names and Numbers) 理事の前村昌紀、APNIC (Asia Pacific Network Information Centre) 理事の奥谷泉です。今回はこの3名に登壇してもらい、グローバル目線から見た日本、これからのインターネットについて語ってもらいました。

ISOC、ICANN、APNICそれぞれの理事として、どんなことをやっているのか？グローバルに活躍するとは？

**江崎:**  
2007年5月にISOC理事になって、そこから3年の任期を務めたのが最初で、2015年に再び理事に選ばれ、2017年に再選されました。今回の任期は2020年までで、これが最後の任期かな。

ISOCでは各理事に対する役割は特に決まっていけれど、アジアを代表して行動することや、自分のバックグラウンドからもIPv6をはじめとした技術的な話題、調査研究活動に積極的に取り組むように意識している。

最近の取り組みだと、G7サミットとIGF (Internet Governance Forum)、W3C (World Wide Web Consortium) との連携などは上手くいった例だと思うし、日本のコミュニティを紹介できたのはとても良かったかな。

**前村:**  
2016年11月にアドレス支持組織 (ASO) が選出する枠でICANN理事を任命し、2019年までの3年間が任期です。理事としての活動はとても新鮮ですが、活動範囲がとても広く、最終的判断を下すために相当の資料を読み込んで、理解するのは本当に大変です。というのもICANNでは、ICT全般の話題について自身への影響も含めて、幅広く検討しており、影響が大きいと判断すれば、それに合わせたマネジメントなども検討します。議論を中を見てとても面白いですね。ICANN会議は年に3回開催されますが、理事会は合宿検討も行われるため、年に計6回あります。



江崎浩 (えさきひろし)  
ISOC 理事  
JPNIC 副理事長

2014年に引き続き、2017年4月に団体会員枠としてISOC理事に再選出。2014年以来、今回が3回目の選出で任期は2020年まで。

ICANNでは理事の役割を決める際には、まずは出自などからそれぞれがやるべきことが優先され、自分はASO選出のため技術的な検討を多くやっています。WHOIS (RDS) の委員会や国際化ドメイン名 (IDN) も担当しています。理事のバックグラウンドはさまざまで、非技術者もそれなりにいて、女性は3人です。

**奥谷:**  
APNIC理事会は年4回開催され、その間はMLで議論しています。理事会メンバーは8名ですが、1人はAPNIC事務局長なので、実質は7名です。年に2回APNIC会議で理事会が開かれるほか、残り2回は別の地域インターネットレジストリ (RIR) 会議の場で開かれることが多いです。

理事会の中ではNRO EC (Number Resource Organization Executive Council) オブザーバーを担当しています。RIRのCEOが集まって番号資源に関する事項を決定する会議にオブザーバーとして参加する役割で、通常はEC議長が担当するのですが私が担当することになりました。ただ、理事になったばかりでまだ理事会は開かれていないので、ML上での活動が中心です。

最近の面白い動きとしては、APNIC基金があります。今のアジアのインターネットは20年ぐらい前の日本と似たような状況で、これから基盤を整備して、技術者を育てていかないとはいけません。そのためAPNICとは別の組織を立ち上げ寄附を募り、ISPの立ち上げ支援などを行います。豪州政府からも20万AUDの拠出を受けたのですが、これはアジア太平洋地域でCSIRTを立ち上げるための資金です。これから理事メンバーを募集していきますが、この理事の任命も自分たちの仕事です。お金を扱う組織なので、信頼できる人を選び、説明責任などもきちんと果たしていく必要があります。

国の違いによる考え方の違い、グローバル vs ローカルに感じることは？

**奥谷:**  
APNICコミュニティの立ち上げから中心的な役割を果たしてきたのは、豪州、なぜか欧州、そして日本です。他の国も頑張っていますが、議論をリードするところまではいきません。日本は強引に「こうあるべきだ!」とはせずバランスを取って進める面があり、またアジアの複雑な事情を理解している面もあることから、調整役として評価されているようです。ただ、今は南アジアの勢いが凄くあり、声が大きくなってきています。日本から見た立場だけで発言すると全然



前村昌紀 (まえむらあきのり)  
ICANN 理事  
JPNIC インターネット推進部長

2000年10月から2016年2月までAPNIC理事 (2003年からは理事会議長)。2016年6月にアドレス支持組織 (ASO) 枠として選出され、同年11月よりICANN理事に就任。任期は2019年まで。

通じません。そういった相手の状況を見ながら発言していくことが重要ですね。

またアジアではNOG (Network Operator's Group) の活動がここ数年活発です。アドレスポリシー一つとっても、彼らはまだまだIPv4を必要としており、割り振り基準も緩くして欲しいという要望があります。日本の成熟した市場とは全然違い、運用面での課題も日本のように既に整備されているところとは違います。

インターネットの精神と言えば、「オープンでみんなが繋がって、そしてグローバル」というものですが、すべての国がそのような考え方を共有しているわけではありません。初期の頃からインターネットに関わっている国とそうでない国の間には見解に差があります。例えば、NIRというモデル一つをとっても国によって大きく違い、日本はJPNICという非営利の民間団体がやっていますが、他の国は政府組織かその関連組織というところがほとんどです。

**江崎:**  
インターネットが発展し始めた当時、経済的には欧州と米国、そして日本が大きな地位を占めていたという状況もあって、その意味で日本はアジアについて責任を負っている。日本が参加しないと上手くいかないインターネットにおいて良くない動きを押さえる必要もある。また、中国のような大国と上手く関係を取れる国はそうたくさんはいないかな。日本は不思議な国だと思われながらも、バランスが取れている国だと思われる。また日本人にはきちんとした人が多いので、それも信用される要因になっているよね。

ほとんどの国では、会議にやってくるのはエンジニアと商売人の両方なんだけど、ビジネスマンは自分が儲けたいが、オペレーターは上手く動けばそれで良い。ここに国が出てくると、今度はその国のポリシーが関係してくる。日本が上手くいっているのは、民間が政府を押さえられているから。一方新興国は、政府の影響が強いところが多い。そういうところは「予算をよこせ!」というパターンが多い。自分たちでどうにかするという感覚があまり無い。

やっぱりインターネットはグローバルなもの。日本に閉じていない。グローバルとローカルの連携を上手く取っていく必要があるよね。

「マルチステークホルダー」という考え方は、上手く回っていると思うか？

**前村:**  
ICANNはその辺に正面から取り組んでますね。一部の人間だけで決めるんじゃないで、例えば新gTLDならドメイン名を売る人・買う人、ユーザーにISPと、みんなで集まって方針を立てています。立場の違う人が集まっているため、ポリシー策定プロセスそのものがとても重要なんですよ。なので、プロセスは凄くきっちり作られています。そうやって検討されてきたものを最終的に理事会が判断するんですけど、理事会もこれ以上ないぐらい頑張っていると思います。ただ、そこまでやっても全員が満足する結論にはならないことも多く、難しいと同時にちょっと悔しいですね。

**奥谷:**  
マルチステークホルダーモデルと言っても、RIRはICANNとは少し違っています。ICANNではさまざまな立場の人の参加が明示的に求められていますが、RIRでは誰でも自由に参加できる仕組みがあるだけで、その結果として異なる立場の人の参加が実現し

ています。どちらが良いのかは一概には言えませんが、RIRでも「たまたま参加した人だけが検討すればそれで良いのか?」という議論もありますので、もう少し考えてみる必要があるのかもかもしれません。

**江崎:**  
マルチステークホルダーモデルについては、IANA監督権限移管を実現できたことで、自信と信頼を得ることができたんじゃないかな。2014年11月にNETmundial Initiativeについて、プロセスに懸念を示す強い声明をISOC理事会として出した。これはかなりの意思決定が必要だったけれど、ICANNに対して唯一「それはおかしい」と言ったことだけじゃなく、それを言えるステークホルダーがいることも、結果としてマルチステークホルダーモデルに対する信用に繋がった。

インターネットにおいてはもはや、社会的、経済的な部分は無視できないということがある。例えば、3GPP (Third Generation Partnership Project) がIETF (Internet Engineering Task Force) に出てくるようになった。携帯電話の世界は国際電気通信連合 (ITU)、つまりは国連だけど、IETFが定める技術標準は国家によるものじゃないので、国際電気通信規則 (ITR) とは連携させづらい。IETFで決まったものを国連の場に持っていくパスを作るために、3GPPが出てくるようになった。民間で作ったものが国連のポリシーになるわけだけど、国連の場でIETFなんてものを全然知らない人が見たら、「何これ?」となるよね。そう考えると、標準化においても自然とマルチステークホルダーモデルにならざるを得ないんじゃないかな。

インターネットは保護主義を打破できる？

**奥谷:**  
そうなると思うのですが、ちょっと悲観的ですね。むしろ保護主義がインターネットに影響を及ぼさないようにするにはどうしたら良いかを考える必要がありそうです。保護主義的な考え方とインターネットな考え方は大きく性質が違うので、理解を得ることは相当なチャレンジだと思います。でも、挑戦する価値はあります。

**前村:**  
元々、インターネット自体が無理芸な思想でできているものですよ。本来、通信に関しては「国家は通信を遮断する権利を保留する」とITU憲章に書かれている。それを実験だからと言ってどんどん広げていって、無いとどうにもならないような状況にしてしまった。そうやってきたものが、最近では民間と言いつつ政府の人達などと交渉するまでになってきて、こんな世界がきちんと通ってきているのが凄いいと思います。



奥谷泉 (おくたにいずみ)  
APNIC 理事  
JPNIC インターネット推進部/IP事業部

2017年3月にAPNIC理事に初選出。任期は2019年まで。

江崎:

元々経済はグローバルなものなのに、国のお金を作るために国際貿易という概念を作り出して、その時に経済主導から国が前提となった。そうやってずっと続けてきたのに、それがインターネットの登場で崩れてしまった。崩れてしまったのだから、組み替えないといけない。例えて言えば、昔はインターネットが電話のインフラを借りていたんだけど、今では逆。全然変わった。また別の例で言えば、ビットコインには国が出てこない。特定の政府機関に依存しない。これはまさにインターネットそのもの。だから銀行はもの凄く警戒している。なぜなら、彼らはインターネットがいかに自分たちの脅威となったかを知っているから。

みんな、前提に基づいた機構を作るのに苦労していると言えるんじゃないかな。



### インターネットの世界って生きづらくなっている？

江崎:

やることは増えてきているけど、生きづらいというよりはエキサイティングになってきているかな。昔はお金のことなんて考えずにのんびりやっていたが、今はインターネットは社会の中心であり、ビジネス的にも大きな存在。使命感を感じると同時に、それが楽しくもある。

これはJPNIC自身にも言えるんだけど、これまではISPだけ見ていればよかったのが、今ではASPも重要だし、これからはIoTやフィンテックも重要になる。これまでとは異なる業界の人達ともどうやって運用していくのかというポリシー議論が必要になってくる。これまでとは違って、関係する人の数が遙かに多くなってきているけれど、これを怠ると良くないことが起こることがみんなわかっているはず。例えばIoTのセキュリティ。これは彼らにきちんとインプットできなかった僕らの責任もある。彼らが困ると、結果として社会全体が困ってしまう。

前村:

ええ、今は楽しい時なんじゃないかと思いますね。2年前、IANA監督権限移管に関連して、国連会議の場で各国の政府代表に会って意見表明をすることになりました。まさか国連の場に自分が立つて、インターネットはこうあるべきだということを理解してくださいと、自分たちの考え方を伝える日が来るとは思いもしませんでしたね。我ながら凄いとこまで来ちゃったなという感じです。

奥谷:

私も面白い時期だとは思いますが。我々技術コミュニティの人間が今までやってきたやり方だけではダメで、いろいろ擦り合わせていかないとはいけません。インターネットはこれまで技術者中心でしたが、その良さを活かしながらどう実社会に適用していけるのか、考えていかないといけないと思っています。

### グローバルアリーナで活躍する日本人としてやるべきこと、やれること

江崎:

一つはIPv6のグローバルディプロイメント。これはこれからが本格的な時期。もうデュアルスタックなんて止めて、これからはシングル

スタックにした方が良いよねという話がある。こういう情報をきちんとインプットしていかないと、日本の情報産業が出遅れて死んでしまうかもしれない。もう一つはセキュリティ。幸い、日本ではセキュリティドキュメントを政府レベルで議論することができたけど、産業界にはまだまだ。これもきちんとやっていかないとはいけません。

奥谷:

IPv6に関してはそうですね。米国では事例検証により、IPv6ネイティブの方が運用コストなども含めてビジネス上のメリットがあるという結果も出てきています。これが日本にも当てはまるのかはともかく、そういう事例があることは知らせていきたいですね。

日本は現在に至るまでにいろいろ苦労してきましたが、そういった経験をこれから成長していくアジアに対して発信して行って、彼らの手助けをできると嬉しいですね。ポリシー議論でもガバナンスでも、日本からの声は小さいですね。でも、声が小さいだけでいろいろなことをきちんとやっています。それを知ってもらいたいですし、私たち以外の人も声を挙げて行って欲しいと思っています。

前村:

2人の壮大な抱負と比べると少々小さい話になるんだけど、私はきちんと理事会の中で仕事をしていきたいですね。文化を掴んで影響力をもう少し出していきたいです。そういったことに取り組みつつ、一つ頭の中にずっとあるのが、日本人がもう少しグローバルな場に出て行けるようにならないかなということ。日本人以外と話してみると、日本というだけで好感を持たれてるんですね。「バランス感覚がある」とか「仕事をしっかりやってくれる」とか言ってくれるんです。そういう意味で、日本人はもう少し自信を持って良いと思うんですよ。国際社会の場で、「日本人の言うことは良い線いってるよね」とか「日本人となら話が早い」と言われるようにしていきたいですね。

自分はこの業界で仕事を始めてからある意味ずっと、インターネットがきちんと動くようにという調整仕事を続けているわけですが、働く場は変わっても、やっていることは本質的には変わりませんね。自分が正しいと信じることを、みんながこうあるべきだということを、対話を通じて擦り合わせているだけです。もちろん、相手の方が正しいと認めれば、自分の考え方を改めます。内容が高度化はしていますが、やるべきことはこれまでと同じです。